

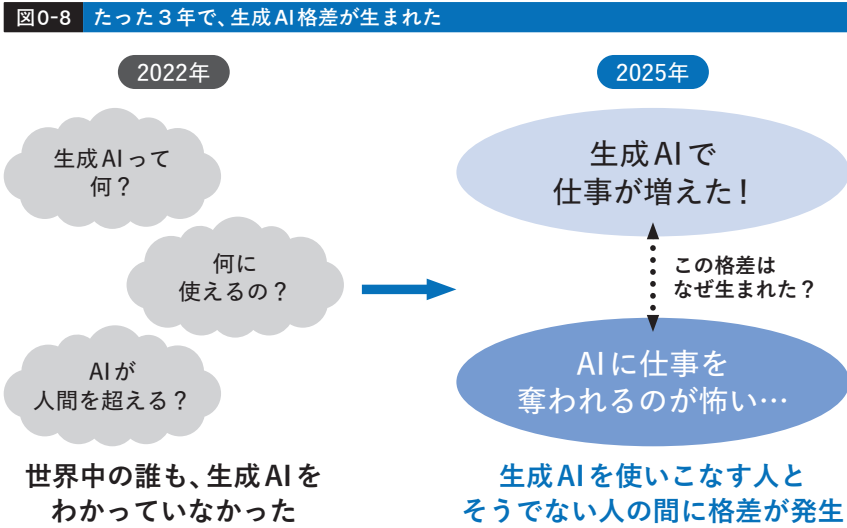


## 生成AIで成果を出す人はここが違う

### 生成AI格差が生まれる理由

ここまで、生成AIに関する社会の動きと、私たちの仕事に与える影響、そして、生成AIとの前向きな関わり方を確認してきました。いよいよ、生成AIで成果を出す人は何が違うのか、という観点でここまでの話を整理し、本書のメインテーマである「6つのアクション」へ話を進めましょう。その導入として紹介したいのが、**生成AIという新しいツールに対する私たち人間の反応**です。

2022年11月にChatGPTが登場したとき、世界中の誰もが「生成AIって何？」「これ、何に使えるの？」と考えていました。最初はみんな同じスタートラインに立っていたはずですが、ところが3年たった今、状況は大きく変わっています。生成AIを日常的に使いこなし、仕事の効率や品質を高めている人は、周囲から高く評価され、新しいチャンスを手にかけています。一方で、「まだ使っていない」「使ってみたけどやめた」という人は、残念ながら成果の差となって現れ、組織や社会の中での存在感が低下しつつあります。実際、Indeed社の調査によると、生成AIのスキルを持つ人は、



持たない人と比べて47%も給与が高いそうです。

生成AIの登場は、インターネットの普及とよく比較されます。学習コストが低く、誰でもすぐ使えるツールが登場すると、これを使って成果を出す人と、そうでない人の差があつという間に広がってしまっています。かつて世界の時価総額ランキング上位に名を連ねていた日本の大企業は、インターネットをきっかけに起こった破壊的イノベーションへの対応に乗り遅れ、軒並みランキングを落としました。個人レベルでもそうです。当時のイノベーションの波に乗り、いち早くITスキルを身につけた人は新しい仕事を獲得し、そうでない人は仕事が減っていきました。現代の生成AIによる変化においても、数年後には「生成AIを使いこなせる人しか採用されない」といった状況は当たり前になるでしょう。

では、なぜ「生成AIって何？」という同じスタートラインで始まったのに、これほど大きな差がついてしま



## 生成AIの得意なこと、苦手なこと

### —生成AIは、正確性と引き換えに、曖昧な仕事を可能にしたもの

AIの進化の歴史を理解したところで、ここからは、生成AIが「一般的なルールベースのプログラムに基づくシステム」（本書では「従来のシステム」と呼びます）と何が違うのかを考えてみましょう。

生成AIの本質を一言で表すなら、「**正確性と引き換えに、曖昧な仕事を可能にしたシステム**」となります。従来のシステムは、指示したことを正確に、間違いなく実行するのが得意でした。例えば「計算をする」「特定の条件に合うデータだけを抽出する」といった処理は、正確性が何よりも重視される世界です。人間がルールを間違って書き込まない限り、機械はずっと同じ結果を返してくれるため、従来のシステムはこのような領域で活用されてきました。

一方で、生成AIは少し性質が違います。「**正確に**」よりも「**いい感じに**」仕事をしてくれれます。

ールの下書きや議事録の自動要約、文章の推敲といった仕事の効率化に活用されています。**画像生成AI**（Stable Diffusion、Midjourneyなど）も有名です。こういったクリエイティブ領域の生成AIは、活用領域のアイデアは多く考えられますが、前述のようにクリエイターからの反発も大きく、SNSなどで「AIで自分をアニメ風にする」といった個人レベルのエンタメ用途での盛り上がりが大きい印象です。音楽生成AIや動画生成AIも進化が著しい分野ですが、画像生成と同様、クリエイターからの反発が大きく、本格的な広がりにはまだ課題があります。

その他の領域では、**スライド生成や図解**などが流行しつつあります。消費者に向けたサービスに生成AIを使うと反発を受けがちですが、業務利用であれば効率化の手段として受け入れられやすい背景があり、2025年時点では、生成AIは生活よりも業務での活用が積極的に進められている印象です。

ここまで、生成AIに至るAI研究の歴史に沿って、生成AIの土台となっている機械学習・ディープラーニングについて学んできました。生成AIは、70年前に生まれた「機械は人間のように対話できるのか」という夢が、実用技術として現実味を帯びてきた存在です。そしてそれは、機械学習やディープラーニングといった積み重ねの上に成り立っています。だからこそ、これまで見てきた基礎知識は、生成AIを理解し、仕事の中で使いこなすうえで欠かせない土台になるのです。



## ——こんな仕事は任せてはいけない—— ——生成AI活用の失敗パターン——

### ■ 正確性が重要な仕事

ここまで、生成AIに任せるべき仕事を見てきましたが、逆に、任せてはいけない種類の仕事もあります。その代表が、「正確性が求められる仕事」です。なぜなら、生成AIはもともと「正確性と引き換えに、曖昧な仕事を可能にしたシステム」だからです。

従来のプログラムは「入力したものに対して、必ず正確な出力を返す」ことを前提に作られています。例えば電卓は、足し算や掛け算を間違えることはありません。ところが生成AIは、**人間が投げた曖昧な問いに対して、もっともらしい答えを返す仕組み**です。そのため、**正確さが100%求められる領域では相性が悪い**のです。

以前、ある自治体が導入した「ごみの写真をアップロードすると分別の方法を指示してくれるチャットボット」が、生成AI導入の失敗事例として話題になりました。アイデアとしては便利そうですが、回答精度にはどうしても限界があります。そしてこのプロジェクトは結局「生成AIの判断精度が低いから使えない」という結論になってしまったのです。しかしこのトラブルは、生成AIの性能が悪いからではなく、そもそも使い方を間違えているのです。「生成AIの精度が低い」ことを評価できる、ということは、「人間が正解を把握している問題」だということです。それならば、生成AIに曖昧に判断させるのではなく、正解のデータベースを作り、それに必ず従って処理するシステムを開発すべきです。例えば「自治体ごとの分別ルールを一覧にまとめて検索できる仕組み」を作り、AI技術はごみの画像認識だけに特化すれば、間違いは起きにくくなります。

同じことは、法令や契約文書、医療診断といった分野でも当てはまります。これらは誤りが一つでもあれば、重大なリスクや損害につながります。**生成AIは参考情報を示す補助役としてなら使えますが、「最終判断を任せる」ような運用は不適切です。**人間が生成AIのアウトプットの正誤を判断できるのであれば、そもそも生成AIに委ねる必要はなく、厳密なルールベース処理のほうが有効なのです。

ただし、正確性が求められる仕事には完全に生成AIの活用余地がないのかと言えば、そうではないということです。どんな仕事でも、プロセスを分解すれば「**正確性を担保する仕事**」と「**多少曖昧でも進められる仕事**」を区別することができます。例えば、ある金融機関では、コンタクトセンターの電話オペレータが、顧客応対中に社内情報を検索するためのAIチャットボットを導入しました。



「良い回答」を引き出すテクニック4..  
 「無茶振り」をする

「パワハラプロンプト」を使う

生成AIから良い答えを引き出すための4つ目のテクニックは、「無茶振りをする」ことです。普通、人に無茶振りをすれば嫌がられるかもしれませんが、生成AIは違います。どんなに無理難題を投げて、「それはできません」と突っぱねることなく、必ず何かしら答えを返してくれます。この特性を活かすことで、自分一人では思いつかなかった発想や切り口にたどり着けるのです。

その中でも特に有効なのが、「**パワハラプロンプト**」と呼ばれる方法です。これは、**生成AIから一度回答をもらった後に「この答えを60点としたとき、100点の回答は何ですか？」と詰め寄るテクニック**です。最初の回答にある程度の質があっても、あらためて「もっと良いものを出せ」と突きつけることで、生成AIがさらに深掘りをして、より精度の高いアウトプットを返してくれるのです。人間相手なら反発される要求でも、生成AIはなんとか回答をひねり出してくれるのが面白いところです。

図3-9 パワハラプロンプト

基本形

その回答を60点としたとき、100点は？



応用形

それはもう考えたから違うのにして

誰も聞いたことのないものにして



それはみんなも言ってるよ

例えば、新しいマーケティング施策を考えているとき、生成AIに「案を5つ」と依頼したとしましょう。最初に出てくるのは一般的なアイデアかもしれませんが、「この5つを60点としたら、100点の答えは何？」と追加で尋ねると、生成AIは「もっと突き抜けたアイデア」を意識して返してくるようになります。最初の回答をたたき台にして、その上を狙わせることで、生成AIから引き出せる答えのレベルを上げることができます。さて、パワハラプロンプトは、そのまま使うのではなく、応用していろいろな問いかけにしてみるとさらに有効です。私がよく使うのは、一度アイデアを出力させた後で「**そのアイデアはもう検討した。私が聞いたことのない施策にして**」という問い方です。これを、本当に聞いたことのないアイデアが出てくるまで繰り返します。まさにパワハラ、という感じですが、実際にこの方法は効果を感じています。



## 生成AIは、足し算ではなく掛け算

### ■ 生成AIが何でも教えてくれるのに、なぜ勉強するのか？

「生成AIに何でも聞ける時代なのだから、もう勉強しても意味がないのでは？」最近、こんな声を耳にすることが増えました。確かに、ChatGPTをはじめとする生成AIを使えば、調べ物やアイデア出しまで、一瞬でこなしてくれますから、「わざわざ勉強しなくてもいいんじゃないか」と感じてしまうのも無理はありません。

しかし私は、むしろ逆だと考えています。「生成AIが何でも教えてくれる時代だからこそ、今まで以上に勉強しなければいけない」と。このことについて考えていきましょう。例えばITの専門家を自称している私が、誰かに「生成AIのトレンドを教えてください」と相談を受けたとします。そこでもし、ChatGPTに「生成AIのトレンドを教えてください」と質問し、その回答をそのまま相手に転送したら、どうなるでしょうか？ 一応、答えにはなっているかもしれないかもしれませんが、相手からすれば「それなら最初から自分で生成AIに聞けばよかった」と思うはずですよ。

つまり、IT講師である私にとっては、生成AIから得られる一般的なIT知識を持ち、それを教えるだけでは、もはや価値になりません。IT講師として評価される最低ラインは「生成AIでは得られないことを教えてもらえる」であり、その中でもさらに、他の研修会社のコンテンツとの差別化を図るために、自分ならではの独特な解釈やメッセージを伝えなければなりません。そのためには、これまで以上に勉強が必要なのです。

これは、どんな仕事にも当てはめることができます。今までは、専門的な知識を「知っている」だけでなく価値がありました。しかしこれからは、「知っている」ことは価値にならず、生成AIのアウトプットを評価したり、そこに自分ならではの視点を付け加える能力が必要になります。

### ■ 自分が「O」だと、生成AIを使っても「O」のまま

「生成AIを使いこなせば、誰でもすごい成果が出せる」と思っている方は多く、SNSなどでは「生成AIを活用して月収〇万円！」「副業で一気に稼げる！」といった刺激的な広告や体験談があふれています。しかし、ここで誤解してはいけない大事なポイントがあります。それは、生成AIは「足し算」ではなく「掛け算」でアウトプットを生み出す、ということですよ。